



TITLE:

ロッシヤーの歴史的方法

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

CITATION:

白杉, 庄一郎. ロッシヤーの歴史的方法. 經濟論叢 1935, 40(1): 214-235

ISSUE DATE:

1935-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130537>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十一年一月一日發行

新年特別號

免稅點以下の小所得者への地方課税.....	法學博士 神戸正雄
勢力關係の性質.....	文學博士 高田保馬
ブラジルに於ける移民制限問題.....	法學博士 山本美越乃
政策研究に就て.....	經濟學博士 作田莊一
農業政策の擔當者としての産業組合.....	經濟學博士 八木芳之助
漁村經濟調查論.....	經濟學士 嵯川虎三
私經濟との比較による財政の本質.....	經濟學士 中川與之助
自由主義の論據.....	經濟學士 柴田敬
フランス・フランに就いて.....	經濟學士 松岡孝兒
山口藩に於ける幕末の洋式工業.....	經濟學士 堀江保藏
支拂準備の法定に就て.....	經濟學士 中谷實
獨乙の漁場入會制度に就いて.....	經濟學士 岡本清造
積荷單獨海損填補方法の吟味.....	經濟學士 佐波宣平
ロッシャーの歴史的方法.....	經濟學士 白杉庄一郎
經營信任會の效果に就いて.....	經濟學士 大塚一朗
貿易統制の制限性と促進性.....	經濟學博士 谷口吉彦
酒稅の改正.....	經濟學博士 汐見三郎
現金の流通と預金の増減.....	經濟學博士 小島昌太郎
國益主法掛について.....	經濟學博士 本庄榮治郎
新著外國經濟雜誌主要論題.....	

(裝 轉 載)

ロッシャーの歴史的方法

白杉庄一郎

一

精神科學的方法による國民主義的經濟學の確立が問題である今日、歴史的方法によつて國民經濟學を基礎づけた歴史學派の反省は新しい意義をもつと思はれる。ところで歴史學派の建設者はウィルヘルム・ロッシャー(Wilhelm Roscher 1817-1894)であることは一般に承認せられてゐる。だから先ずここにロッシャー國民經濟學の方法論的基礎即ち歴史的方法を検討して見度いと思ふ。ロッシャーが經濟學の歴史的方法を初めて提示したのは『歴史的方法による國家經濟學講義綱要』¹⁾に於てであり、方法論を最も完全せる形で述べてゐるのは『國民經濟學原論』に於てである。それ故に第一に『綱要』に於ける歴史的方法を、第二に『原論』に於て發展せしめられたそれを觀て、終に簡単な批判を試みることにする。

(一) 『綱要』に於て國家經濟學(Staatswirtschaft)といふのは『原論』に於て國民經濟學(Nationalökonomik od. Volkswirtschaftslehre)といふところのものであるが、それは國家學或は政治學(Staatswissenschaft od. Politische Wissenschaft)の重要な一部であつた。²⁾それ故吾々はロッシャーの國家經濟學の方法論に立入る前に國家學一般の方法を觀ておく必要がある。ロッシャーは國家學とは「國家の發展法則

1) Grundriss zu Vorlesungen über die Staatwirtschaft nach geschichtlicher Methode (Göttingen, 1843)。ロッシャーの歴史的方法の萌芽は既に早く彼の學位論文 De historicae doctorinae apud sophistas majores vestigiis Gött., 1838) p. 26 ff. に見られ、Leben, Werk und Zeitalter des Thukydides (1842) S. 35 ff. 239-275 には相當發展せしめられた (Roscher. Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland, 2. Aufl. 1924. S. 1034. Anm.)。

一般の學」であると考へるが、その方法として「哲學的方法 (philosophische Methode)」と「歴史的方法 (historische Methode)」とを擧げてゐる。而して先ず彼はその區別から述べてゐる。

(イ) 哲學者は「出来るだけ抽象的な、即ち空間及び時間の總ての偶然性を出来るだけ除いた、概念或は判斷の體系」を目的とするのであつて、彼が一の事實を定義し、而して今や體系の以前の部分に既に論ぜられてゐないであらうところの如何なる概念もはや彼の定義の内に現はれないといふ場合に一の事實を説明したのである。反之、歴史家は「現實の生活に出来るだけ忠實に寫された、人間の諸々の發展及び關係の記述」を目的とし、彼がその事實をそれによつて及びそれに對してなされたところの人間を敘述した場合に一の事實を説明したのである。――以上がロツシャールの擧げた哲學的方法と歴史的方法との區別である。即ち前者は抽象的概念或は本質を、後者は事實の記述を、求むる研究方法である。これで兩者の區別は先ず明かであるが、その關係は未だ明瞭ではない、然しこれは暫く後の問題として残そう。

(ロ) 更に別の觀點からロツシャールは哲學的方法について論ずる。「哲學的國家論 (die philosophische Staatslehre) が現はれるところの最も普通の形は理想國家の形 (die Form des Idealstaates) である。」とこゝでこの「諸の哲學的國家理想 (die philosophischen Staatsideale)」は種々の表現、異つた基礎を有ち全く主觀的なものである。「然し殆んど總ての國家理想は、それが一見抽象的に見えようとも、著者を現實に於て繞るところの、或は著者の黨派が現實に採用せんと努力したところの、その政治的狀態

2) Nystem der Nationalökonomie, Bd. I. Grundlage der Nationalökonomie, (1854, こゝには 1922, 26 Aufl. durch R. Pöhlmann による) この外ロツシャールの著書は數多く、その何れも何程かの程度に於て歴史的方法研究の手がかりを與へる。こゝにはその代表的なものとして Grundriss と Grundlage とを選んだ。而してこの二著の中間に位する、Der gegenwärtige Zustand der wissenschaftlichen Nationalökonomie und die notwendige Reform derselben (Antritt-

の少しく美化された模寫に過ぎない。」蓋しそれは、「偉大なる國家學者の活動は通常彼等がその時代の人々の暗い感情及び基礎づけられざる希求に科學的表現と科學的基礎づけを與へる (den dunkeln Gefühlen und unbegründeten Wünschen ihrer Zeitgenossen wissenschaftlichen Ausdruck und wissenschaftliche Begründung verleihen) といふ點に存する」からである。かくの如く哲學的國家學者の使命を觀た上でロッシャーは科學的表現と基礎づけを得た國民の現實の要求は、變化した國民は變つた制度を要求し得るが故に、結局は充されねばならぬと言ふ。而して彼は、かゝる時期を「危機 (Zwischen)」と呼び、その遂行の仕方が合法的であるか強力的であるかに従つて改革と革命とに分ける。進んで危機と理想との關係について、諸々の危機に現はれる諸哲學的國家理想は主觀的性格を有つ、然しそれらは「歴史的に把握されるならば」矛盾するものでなく、「その時代その國民にとつて正當であり得る」と述べてゐる。

こゝに於て吾々は哲學的方法の二の面を見る。第一は本質究明のそれであり、第二は理想化のそれである。兩者の關係は、第一の哲學的方法によつて得られた概念或は本質が、多くの哲學的國家學者によつて普通理想として掲げられ第二の方法となるといふ點に在る。吾々は後に前者は抽象的方法、後者は理想的方法として『原論』に發展せしめられるのを見るであらう。

(ハ) 歴史的方法——第二の哲學的國家論は主觀的であつたが、歴史的方法是、道を誤らない限り、如何なる場合にも客觀的眞理を有つと、ロッシャーは考へる。而して歴史的方法の要點は、

srede auf der Leibziger Universität), Deutsche Vierteljahrsschrift, 1849. は參照さるべき興味ある論文だと思はれるが、この文獻に觸れ得なかつたのは遺憾である。

- 3), 4) Grundriss. S. 4.
- 5) Grundriss. S. 3.
- 6) Grundriss. S. 1-2.

人間の政治的衝動は「總ゆる既知の國民の比較」からのみ研究され、この比較に於て、「異つた諸國民の發展に於ける同種のもの (das Gleichartige) は發展法則 (Entwicklungsgesetz) として結合され得る」といふ點に在る。この外その自然研究との類似、實踐にとつての有用性について述べ、「歴史的方法の最高の目標は人類の政治的結果を科學的工作によつて後世に傳へるといふ事に在る」と言ふ。

(二) 國家學或は政治學一般の方法としてロツシャーが述ぶところは以上の如くである。從來の哲學的方法に對して彼が特に主張するのは歴史的方法である。然らば國家學一般の方法としての歴史的方法は國家經濟學の方法として如何に具體化されるか。それがなされてゐるのは有名な『綱要』の序文に於てある。そこに於て彼は歴史的方法は單に外面的に「對象の年代的配列」にのみならず、次の諸命題に示されるとして歴史的方法提唱の四の理由を擧げてゐる。

先ず第一に經濟學の本質が歴史的方法を必要ならしめる。即ち國家經濟學は單に「クレマステイク即ち致富術 (eine Chremastik, eine Kunst, reich zu werden)」にとどまるものでなく、一の政治學である。政治學は國家の發展法則一般の學であつたが、國家經濟學は「國民經濟の發展法則の學」である。而してその具體的内容を規定して曰く、「吾々の目標は、諸國民が經濟上何を思考し、意欲し、知覺したか、何を彼等が追求し、獲得したか、又何故彼等はそれを追求し、何故それを獲得したか、の叙述である」と。かゝる叙述は國民生活の他の諸科學特に法制史・國家史及び文化史との密接な聯關に於てのみ可能だとされる¹⁰⁾。

7) Grundriss. S. 2.

8) Grundriss. Vorrede. S. III-IV.

9) Grundriss. S. 4.

10), 11), 12), Grundriss. Vorrede. S. IV.

第二に國民の從つて國民經濟の歴史性が歴史的方法に導く。曰く「國民(*das Volk*)とは單に今日生存する諸個人の集團ではない。從つて國民經濟を研究せんとする者は、單に今日の經濟狀態の觀察を以つて満足することは出来ない。かくて以前の文化段階の研究は、實にそれは現在の凡ての未開國民にとつて最善の教師であるが、殆んど同一の重要性を有つかに見える……」¹¹⁾と。

第三に現象の内に本質を認識することの困難が諸國民經濟の歴史的比較を要求する。曰く「諸現象の大集團(*die Grosse Masse von Erscheinungen*)から、本質的なもの、合法的なもの(*das Wesentliche, (ieselzmässige)*)を見付け出すことの困難は、吾々が如何にしてか有ち得るところの諸國民を經濟上相比較するといふことを、吾々に切に要求する。近代諸國民は洵に總ゆる點に於て密接に組合されてゐるので個々の國民の觀察は總ての國民の觀察なくしては不可能である。而して既に死滅せる古代民族は、その發展が如何なる場合にも全く完了して吾々の前に横るといふ教ふところ多きものを有つてゐる。それ故に近代國民經濟の内に、古代のそれに相似た一の傾向(*eine Richtung*)が示される場合には、吾々はこの比較に於てその傾向の判斷に對して極めて貴き導きの糸を有つてあらう。¹²⁾」

第四に彼は諸々の制度の歴史的相對性が國家經濟學の課題を規定して歴史的方法を採らしめると言ふ。「歴史的方法は輕率に一定の制度を直に賞讃し、或は直に非難しないであらう。蓋し一切の國民、一切の文化段階にとつて有效若くは有害であらうところの制度は確かにこれまでに殆

んど存在しなかつたからである。幼兒の引紐、老人の撞木杖は成人にとつては堪え難いものであらう。如何にして又何故に漸次『理性から背理 (Verunft Usinn',)』が『恩恵から災厄 (Wohlthat Plage')』が生じたかを説明することがむしろ科學の主要課題である¹³⁾と。

要するにロッシャーが歴史的方法を主張する所以は、國民經濟は歴史的なものであつて、その諸制度は相對的であるから、これらの研究は歴史的にのみ可能である、而して複雑な現象の内に本質を發見することの困難もこれらの歴史的比較によつて解決され得る、だから吾々は過去及び現在に於ける諸國民の經濟活動を忠實に叙述し、比較しなければならぬ、といふ點に在る。そして彼はこれこそが國家經濟學の使命だと考へたのである。

次いでロッシャーは彼の歴史的方法の思想的聯關を明かにしてゐる。第一に「この方法はサヴィニイ・アイヒホルンの方法 (die Savigny-Eichhornsche Methode) が法律學に對して獲得したと同様のものを國家經濟學に對して獲得せんと欲するものである¹⁴⁾」と述べて歴史法學派への關係を示してゐる。第二に當時最も支配的であつた經濟學即ちリカード學派に對する態度を決定して曰く「この方法はリカード學派から離ること遠きものである、尤もそれは直接には決してリカード學派に反對するものでなく、又その成果を有難く利用せんとするものではあるが」と。然しそれはリカード學派に對してよりもむしろ「マルサス (Malthus) 及びラウ (Rau) の方法」に一層近いと彼は言ふ¹⁵⁾。最後に「私はこの眞理への道を唯一のもの或は絶對的最捷徑だときへ考へはしないが」と幾

13) Grundriss. Vorrede. S. IV-V.

14) SavignyとRoscherとの歴史的役割は異つてゐた。前者は十八世期的變革に對して保守的であり、諸制度の歴史的根據を示して之を辯護したのに反し、Roscherは自由の制度の熱心な信奉者であつた。C. Menger. Untersuchung über die Methode der Sozialwissenschaften und der Politischen Ökonomie insbesondere, Leipzig, 1883, S. 260-279.

分の躊躇を以つてゝはあるが、その豊饒さを確信しつつ、歴史學派獨立宣言の文字を次の如く結んでゐる、「歴史 (die Geschichte) に對して歴史的國家經濟學 (die historische Staatswirtschaft) は組織學及び動物科學 (die Histologie und Zoöchemie) が今日博物學 (die Naturgeschichte) に對してなしてゐると同様のことをなすことが出來又なすべきである」¹⁶⁾と。

(三) 以上吾々は歴史的方法を中心としてロツシャール國家經濟學の方法論を觀て來た。その際吾々は二面的な哲學的方法と歴史的方法とを受取つた、而してその區別は一應明かであつたが、その關係は必ずしも明かではなかつた。だからこの關係の考察を以て『原論』に於ける方法論吟味への移行としよう。第一に哲學的方法是總ての偶然性を抽象して事物の本質を把握せんとする、その限りに於て哲學的方法是分析的・抽象的方法である。經濟學について云へば英國に於てはそれが哲學といふ別名を有つてゐたことは夙にヘーゲルも指摘してゐるところであるが、¹⁷⁾ロツシャールが觀念した如き英國流の經濟學・特にリカード學派は抽象的方法を主としたから、その限りに於て、哲學的方法を以つて抽象的方法を意味したものと解して誤りなからう。而してロツシャールは既に見た如く、敢へてリカード學派に反對するものではない、このことから明かなるが如く、この意味に於ける哲學的方法是歴史的方法に矛盾するものでなく、却つて前者は後者の準備段階である。次に抽象的方法としての哲學的方法によつて得られた本質的なものは通常理想として掲げられる。然しかゝる第二の哲學的方法のとり哲學的國家理想は主觀的なものであつて、その相對性は

15) 歴史的方法の萌芽は既に Aristoteles, Montesquien に存し、それからドイツ法制史家、及び國民經濟學者特に A. Smith, Stewart, Malthus, Storch 及び Rau によつて促進されたといふ (Grundriss. S. 150)。

16) Grundriss. Vorrede, S. V.

17) Hegel. Encyclopädie der Philosophischen Wissenschaften, § 7.

歴史的方法によつてこそ闡明されると云ふのであるから第二の意味の哲學的方法『原論』には理想的方法といふは歴史的方法に對立するであらう、けれどもその對立は『原論』に於ける程徹底的なものではないと考へねばならぬ。かくてロツシヤは歴史的方法を主張することによつて第一義の哲學的方法『原論』には抽象的方法といふを自己への準備段階にまで押し下げ、第二義のそれに對立せしめるのである。要するにロツシヤの國民經濟學の方法は第一義の哲學的方法を止揚した歴史的方法だと言ひ得る。¹⁸⁾然し以上は後に發展せしめられたものに照して考へられるのであつて『綱要』に於ては未だ明確な觀念に到達してゐない。蓋し『綱要』はロツシヤ經濟學體系の覺書的なものであるからであつて、それが完成されたのは彼の畢生の大著『國民經濟學體系』¹⁹⁾に於てである。而して『綱要』の思想は含蓄的全體として『體系』を貫いてゐる。だから吾々は次に『體系』の第一卷『國民經濟學原論』について彼のより發展せる歴史的方法を見よう。

二

彼は『原論』の緒論第三章を國民經濟學の方法にあてる。先ず彼は神學的方法及びローマ法を普遍的理性と觀た十七世紀の法律學的方法を古くなつたとして排斥する。次いでさきの第一義の哲學的方法即ち抽象的方法から述べる。

(一) 抽象的方法——抽象的方法に於てロツシヤは數學的方法を認めることは注意さるべきであらう。「國民經濟學の普遍的部分が數學的物理学と多くの類似點を有つことは明かである」。而し

18) 從來のロツシヤ解釋に於て哲學的方法は一義的に抽象的方法に解された、例へば Max Weber, Roscher u. Knits., Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922, S. 8. Lifschitz, Die Historische Schule der Wirtschaftswissenschaft (1914), S. 87. 山口庄太郎氏「經濟學說史研究」39-40頁。

19) System der Volkswirtschaft, I. Grundlage der Nationalökonomie 1854, II.

て多くの人が國民經濟的法則を代數的公式に現はしたといふことは驚くべきではない、蓋し大さと大きの關係が現はれるところでは計算が可能であり、ヘルバルトは之を心理學に於て示したのであるが、吾が科學も心理學であるから。然しそれは抽象に充ちてゐるといふこと、及び數學的表現の利益はその適用事實の複雑化と共に、數學的表現が益々煩雜になるから、消失するといふことを忘れてはならぬと述べてゐる。²⁰⁾進んで彼は抽象的方法一般について論ずる。一體吾々の科學は如何なる場合にも人間を扱ふ場合には、それがあるがまゝに（全く異つた而も亦非經濟的動機からも動き、特定の國民・國家時代に屬する等）考へねばならぬ。恰も人間は生れながらに平等にして、たゞ教育・社會的地位等によつて差異あるに過ぎず、平等な熟練・自由を以つて經濟的生産及び消費に向けられるならば總て全く平等であるかの如き抽象、それはリカードやフォン・チューネンが事實上示した如く、「國民經濟學の準備工作に於ける不可缺の段階」にあたる。殊に一の經濟的事實が多くの異つた要因の相互作用によつて成立つ場合には、研究者の精神に於て、時々、その固有の性質が研究さるべきであるところの要因を遊離するは有益であらう。人は總てその他の要因を暫く靜止的或は不變なものとして置き、それから吟味さるべき要因の變化——それが増大にせよ減少にせよ——が如何にして起るであらうかを問題とする。然しかくの如きは單なる抽象に過ぎずして、その抽象から、人は單に實踐への移行に於てのみならず、完全なる理論に於ても、再び現實生活の無限なる多様性へ復歸しなければならぬといふ事を忘れてはならぬと述べてゐる。²¹⁾

Nationalökonomik des Ackerbaues u. d. verwandten Urproduktionszweige 1859, III. Nationalökonomik des Gewerfleisses u. Handels 1881, IV. System der Finanzwissenschaft 1886, V. System der Armenpflege u. Armenpolitik 1894.

20) Grundlage. S. 67-68.

21) Grundlage. S. 68.

ロツシヤは既に見た如くさきの第一義の哲學的方法即ち抽象的方法を否定しない。歴史的方法は次に見る如く存在^{ザイン}の研究方法であるが、それは當然に歴史的なるもの以外に理論的なるものを含む²²⁾。又一偉大なる經濟學者が今迄陥つた誤謬たる抽象的方法は唯研究の準備段階として許されるのみで完全な學理にとつても實踐にとつても殆んど許されない²³⁾といふ語の反對解釋からも明かなる如く、彼は數學的方法をも含めた抽象的方法を歴史的方法への止揚的契機として承認する。ばかりではない、彼は普遍性を忘れた相對主義への墮落の危險から歴史的國民經濟學者を救ふものは「抽象的國民經濟學の活きた知識」であるとの自覺をさへ有つ。更に言ふ、「この抽象的國民經濟學も同様に、各々の研究者が彼自身の日常生活に於て、彼自身並に彼の親しい知人の經濟的活動及び結果の比較に於て、有つた觀察に基くところの實證的觀察科學(eine positive Betrachtungswissenschaft)である。この『抽象的』學説は、國民經濟の理想表現も亦それを必要とするのであるが、歴史的特殊研究がまだ進んでゐない場合に開花する。而してその逆は逆である。けれども結局に於ては科學の眞の發達のためには二の面の相互作用が無條件的に必要である²⁴⁾」と。この點彼は單なる歴史主義者では決してない。而して歴史學派の建設者としての彼の抽象的方法に對する決定的なる態度は歴史的方法への準備段階といふ地位を前者に指定した點に在る。

(二) 扱て、ロツシヤは抽象的方法の基礎の上で更に二の方法を區別してゐる。曰く。「國民生活の研究するところのあらゆる科學に於て二の主要問題の設定、即ち何であるか、何であつたか如何

22) 「歴史的方法は Was ist? の研究だといふ。而して Was ist? は Was ist gewesen? Wie ist es so geworden? を含む(Grundlage. S. 69)。ところで前者は後の二者以外に固有の Was ist? を有つ、そこに抽象的即ち理論的研究が存立する。ロツシヤがリカードは専ら「事物の存在 (das Sein der Dinge)」を研究すると言つたのはこの意味である。Was ist? を研究するのが歴史的方法であるならリカードも歴史的方法の代表者になるではないか」と難する

にしてそうなたか等)と何であるべきか、とが區別される。尤も例へば全國民經濟の如何なる體系もこの問題の一に専ら満足することは出来ぬであらう、然し一或は他の決定的優越に従つて、(實證的)生理學的或は歴史的方法 die (realistische) physiologische oder geschichtliche Methode 及び理想的方法 die idealistische Methode の對立が「示される」²⁴⁾。

『綱要』に於ける哲學的方法と歴史的方法との對立は『原論』に於ては理想的方法と歴史的方法との對立となつてゐる。同じく歴史的方法に對立するものとしての哲學的方法と理想的方法との關係をロツシヤは明かにしてゐない。けれども吾々はさきに哲學的方法を第一に抽象的方法、第二に理想的方法の意に解した。而して前者が後者を止揚することは彼自身の語からも明かである。²⁶⁾だから『綱要』の哲學的方法は『原論』に於ては抽象的方法と理想的方法とに分れ、而も前者は國民經濟學の不可缺の準備段階として理想的方法にも歴史的方法にも止揚されるから、對立は理想的方法と歴史的方法となる譯である。²⁷⁾

ロツシヤの理想的方法とは當爲の研究方法である。彼はそれを論ずるに國民經濟の理想の性質から始める。理想とは「時代ツァイト・ペリユドの要求を科學的明瞭性を以つて言明し科學的根本性を以つて基礎づける」ものである。而して精確に時代の要求を表現する限り理想は結局實現されねばならぬ。然しそこには古きものと新しきものとの衝突が起るであらう。こゝに國民生活の變革期が来る。「海が干潮と満潮との間を永遠に動搖するが如く、國民生活は安定期(Ruhezeiten)と危機(Krisen)との間を

Lifschitz.(a. a. O. S. 91)は、この點を全く理解せざるものである。

23) Roscher. Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland. S. 1032-33.

24) Grundlage. S. 82-83.

25) Grundlage. S. 69. — 尙ロツシヤは本質的に異つた意味に於て方法といふ語が使用されるとして後の歴史學派が大いに問題とした歸納法と演繹法との問題にはんの一言註してゐる。彼はそこで大體ミルの見解に同意してゐる

永遠に動搖する。安定期とは形式 (die Form) が内容 (der Inhalt) に完全に一致する場合であり、危機とは變つた内容がまた變つた形式を形成せんとする場合である。」かゝる危機は實定法の平和的方法による遂行か非合法的遂行なるかによつて改革と革命とに分れる——ロツシャーは革命に反對する。「退嬰的な古きもの及び進取的な新しきものに對して適當なる門戸を供するために充分賢明に制定されたる憲法」と「譬へ不便否犠牲の伴ふありとするも、この法的門戸のみを利用せんとする總主要國民階級の倫理的自制」とによつて變革を平和的改革たらしめん事を彼は主張する。²⁶⁾進んで彼は理想的方法を批判する。「疑もなく總ての國民經濟的な法律並に施設は國民のために (um des Volkes willen) 存するのであつて、逆ではない。」從つてそれらの變革は何ら惡ではなく、それが國民自身及びその要求の變化に一致するかぎり善である。然しそれはその國民、その時代にとつてのみ正しく自然的であり得るのであつて、それが普遍妥當なりとして掲げられる場合には誤りであらう。「諸國民の普遍妥當の經濟理想の存せざるは、猶諸個人の何人にも適合した衣服の寸法のなきが如くである。」從つて最善の國民經濟理想を作製せんとする者は——大抵の學者は實際之を欲したのだが——完全に眞且つ實踐的であるために種々の國民性 (Volkseigenlichkeiten) と同數の理想を列舉せねばならず、而もこれらの理想について少くとも數年毎に改訂を加へねばならぬであらう。けれどもかくの如きは全く學者の能くし得るところではなくて、むしろその方策を本能的に感ずる實際家の才能に俟たねばならぬと言ふ。²⁷⁾

(Grundlage, S. 72)。要するに彼はこの區別を大して重視せず兩者は結合さるべきものと考へる (Gesch. d. N=O in Deutsch. S. 1036)。

26) 既に引用した個所に曰く、「抽象的學説は、國民經濟の理想表現も亦それを必要とするのである」と (Grundlage, S. 83)。

27) かく解するに初めて『綱要』と『原論』とに於ける方法は統一的に理解され得る。然るに Lifschitz は『綱要』に於ける哲學的方法を一義的に演繹的抽象

(三) かくてロツシャーは理想的方法を斷念し、歴史的方法を主張する。曰く。「吾々は學理に於てはかくの如き理想の作製を全然斷念する。吾々がその代りに研究するのは、第一に國民の經濟的性質及び欲望、第二に國民欲望充足に規定されてゐるところの法律並に施設、最後にそれが齎した大小の效果の簡單な敘述である。従つて云はゞ國民經濟の解剖學及び生理學 (die Anatomie und Physiologie der Volkswirtschaft) である！」³⁰⁾

彼は右の研究は自然研究に似てゐると言ふ。顯微鏡的研究、解剖等に於て吾々に缺くところは無い。而して歴史的研究は一方では精神の自己觀察が無制約だといふ點で自然研究に優るが、他方比較し得る國民が限られてゐるといふ點で劣る。だから歴史的方法に於ては、「差別性 (die Verschiedenheiten) に對して類似性 (die Ähnlichkeiten) に對すると同様の關心を以つて、後者を原則 (Regel)、前者を例外 (Ausnahme) として結合し、これによつて説明につとめねばならぬ。」³¹⁾——續いて言語の用法 (der Sprachgebrauch) が一般歴史上に於けると同じく國民經濟學上に於ても重要な意義を有つと言つてゐるが、それは解釋學的方法の國民經濟學への適用可能を觀たものであらう。³²⁾

續いてロツシャーは歴史的方法によつて多くの論争が除去される、蓋し歴史的方法は、第一に一定の事情の下に有用であつたものを如何なる事情の下に於ても貫徹さるべしとする誤謬を避け、第二にそれは「國民經濟の自然法則 (die Naturgesetze der Volkswirtschaft)」を否定しないからであると述べてゐる。³³⁾ 惟ふに、この二點に於て彼の歴史的方法是は偏普遍主義並に偏特殊主義を免れてゐる

的方法と解するが故に『綱要』と『原論』との間に何らの統一がないとする (a. a. O. S. 87-89)。『綱要』に於ける第二義の哲學的方法が全く『原論』の理想的方法と同一趣旨のものであることは以下の論述が示すであらう。

28) Grundlage S. 73-75.

29) Grundlage. S. 75-76.

30) Grundlage. S. 77.

31) Grundlage. S. 77-78.

32) Grundlage S. 78.

33) Grundlage. S. 78-79.

る。而して自然法則の承認は、彼が抽象的方法を認めた當然の歸結ではあるが特に重要である。

「吾々は、國民經濟の發展過程のこゝかしこに於て可能であるところの些々たる恣意的諸偏差 (die kleinen willkürlichen Abweichungen) は大數法則 (das Gesetz der grossen Zahlen) に従つて大抵は相殺されるといふことを發見する。こゝにも亦誰もそれを豫感しないで長い間存在して來たところの調和・屢々美の調和が存在する。無數の自然法則、それは個人によるその時その時の承認を俟たず、それに服従することを理解する人のみがその上に力を取得し得る (ベコーン)。然しながら吾々は忘れてはならない、國民經濟の自然法則は、一般に人間精神のそれと同じく、一の主要點に於て物質界のそれから區別されるといふことを、即ちそれは自由なる理性的存在——まさにそれ故にその良心に對して責任的であるところの、そしてその總體が進歩可能の種族であるところの、自由なる理性的存在に關するといふことを。」³⁴⁾——又この自然法則は「人間の意圖 (menschliche Absicht) に基づかざる、より廣き聯關に於て説明され得る合法則性 (Regelmässigkeit)」³⁵⁾だとも述べられてゐる。つまり市民社會に普遍的に貫徹してゐる無自覺的必然の社會法則である。而してロツシヤーが自然法則と呼ぶのは多くの場合體系的構造の所謂抽象的即ち理論的研究の結果である様に思はれる。³⁶⁾而してそれは一定の歴史的段階に於ては普遍妥當の性格をもつ (その内に總ての歴史的段階を通じて妥當なるものが止揚されてゐることは言ふまでもない)。

右の體系的な自然法則の外にロツシヤーは發展的な自然法則を認めそれを發展法則と呼ぶ。尤

34) Grundlage. S. 35.

35) Grundlage. S. 38. そこでロツシヤーはヒルデブラントの自然法則否定に反對してゐる。ヒルデブラントは自然法則が人間的自由、人間的進歩可能性に反するとするが、ロツシヤーは人間の自由なる行爲も社會的に見れば個人の自由なる意圖から獨立して法則化される、自然とは本質 (例へば人間心の本質 Natur der menschlichen Seele) といふ場合に於ける如く) の意であると言ふ。

も彼は自然法則、發展法則並にその關係の何れについても明瞭な叙述を有たず曖昧極るものである。けれども、歴史的方法が抽象的方法を基礎とした如く、體系的な自然法則を基礎として發展法則が成立すると解釋すべきであらう。³⁷⁾而してこの國民經濟の發展法則の獲得こそが、既に述べた如く彼の國民經濟學の使命である。然らば發展法則は如何にして得られるか。曰く、「異つた諸國民の發展に於ける同種のもの」(das Gleichartige)は發展法則として結合され得る³⁸⁾と。即ち先ず一定の内容に相應する國民經濟の諸形態を批判的に比較する、その比較に於て「類似性を原則とし差別性を例外として結合する」³⁹⁾かくて得られる原則は、それが諸國民の發展過程に關する正しき洞察に基く場合には歴史的客觀性を有つ。³⁹⁾これが發展法則である。この發展法則は、例へば、各國國民經濟を國民生活と同じく發生・成長・成熟・老衰の諸期に分つ。⁴⁰⁾又彼は生産要素を標準として國民經濟の發展は夫々自然力・勞働・資本が支配的な三段階に分たれるといふ所謂經濟發達段階説を樹立してゐる。⁴¹⁾更にこの發展法則に基づいて、個々の國民の歴史はその諸々の編を形成するに過ぎないところの全體としての人類の歴史を觀察すれば「人類の發展段階」の系列が得られるとする。⁴²⁾而してこの系列に於て先なるものは後なるものに「導きの糸」を與へる。かくしてこの意味の自然法則は深刻な動搖期・輿論の波濤中に於ける「科學的眞理の確固たる島嶼」であり、歴史的方法は發展法則の不知に基く自負に對抗するといふ。⁴³⁾——惟ふにロツシヤの發展法則は歴史的方法の成果である。ところでこの意味の發展法則は發展的構造の普遍的な型即ち發展的典型 (Entwick-

36) 例へば大數法則による婚姻、離婚の合法則性、價格法則等、Grundlage. S. 38.
 37) ロツシヤの自然法則は直に發展法則に一致すると解すべきではない。自然法則は國民經濟の靜的聯關即ち體系的構造に於けるものと動的聯關即ち發展的構造に於けるものとに分れ、後者がロツシヤの謂ふ發展法則にあたる。
 38) Grundriss. S. 2. 39) Grundlage. S. 80. 40) Grundlage. S. 40. 41) Grundriss. S. 7. Grundlage. S. 137-38. 42) Grundlage. S. 81. 43) Grundlage. S. 79. 80.

Klungstypus)である。この發展法則の上に眞の歴史研究即ち個性の研究が可能となる。ロツシヤは或る所で述べてゐる、「一般的發展法則 (die allgemeine Entwicklungsgesetze) を識る者のみがその發展法則の國民性的例外と修正 (die nationalcharakteristische Ausnahmen und Modificationen) を判斷することが出来る」⁴⁴⁾。然し彼は發展的典型としての一般的發展法則研究の必要を高調するのみで未だ眞の個性研究従つて個體そのものゝ發展法則に言及してはゐない。この點は後た觸れる。

最後にロツシヤの歴史的方法是統計的方法に對立するものではない。⁴⁵⁾ 曰く、「相並ぶものゝ統計的觀察と異つた歴史的段階の相繼續するものゝ歴史的觀察とは最も立派な仕方互に助け合ひ統御し合ふ」⁴⁶⁾と。彼は兩者を合して實證的或は歴史的「實證的傾向 (realistisch od. historisch realistische Richtung) と呼んでゐる」⁴⁷⁾。

三

ロツシヤの歴史的方法是大要右の如くである。⁴⁸⁾ 之に對する精神科學的立場からの批判の一二を以下に附け加へよう。一體ロツシヤが強調した歴史的方法が國民經濟學にとつて缺くべからざるものであることは今更喋々するを要しない。従つてロツシヤ方法批判の問題は、その夾雜物を除き缺點を補ふにある。夾雜物といふは自然科學的傾向であり、缺點といふは理想的方法の放棄である。

それらの批判に立入る前に、吾々は、ロツシヤの國民經濟觀——これについては別に詳しく

44) Ansichtn der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte, 1861, S. 14. 尙國民性と外的自然との關係については、Grundlage, S. 101. 45) Grundlage, S. 47-78. 46) Grundlage, S. 1035. 47) Grundlage, S. 69, Gesch. d. N=Ö. in Deutsch. S. 1032-34.

學び度いと思ふのであるが——について一言して置くことが是非必要である。彼は國民生活從つて國民經濟を、「有機體 (Organismus)」にして、發生・成長・成熟・老衰するものと觀¹⁹⁾、又有機體の諸器官の間に於ける如く、國民生活の諸域間の相互作用を認める。從つて彼は經濟生活の重要性を認めてその過少評價を許さぬと同時に、その一方的優越をも承認しない。⁵⁰⁾ところでロツシヤが國民生活の諸々の域の相互作用を認めた點は正しいとして、彼の有機體説は批判されねばならぬ。而もこの有機體説には神祕主義が纏りついてゐる。結局に於て彼は國民經濟を神の創造に係る有機的生命と考へる、尤も彼が神祕的な「説明し難き背景」を科學によつて排除せんと努力してゐる點は認めなくてはならぬが。⁵¹⁾その詳細は別に考へるとして、こゝにはこの神祕的有機體説に基づく方法論的歸結だけを問題としよう。

(一) ロツシヤが國民經濟を有機體と觀たことは彼の歴史的方法の自然科學的殊に生物學的傾向とし現はれる。或は「歴史に對して歴史的國家經濟學は組織學及び動物科學が今日博物學に對して行つてゐると等しきことをなすことが出來又なすべきである」と言ひ、或は「歴史的」と「生理學的」とを同意義に用ひ、或は國民經濟學とは「云はゞ國民經濟の解剖學及び生理學」或は「國民の生理學又は醫學⁵²⁾」と呼ぶ。即ち國民經濟なる有機體に對して生理學・解剖學・醫學の役割をなすのが國民經濟學だといふ譯である。かゝる傾向は勿論生物學的思潮が時代の風をなしてゐた十九世紀の生的事情から理解し得るであらうが、それはともかく、この點に於てロツシヤの方法は眞に

48) この方法論の上に國民經濟學が基礎づけられる。既に見た如くロツシヤによれば、國民經濟學、(『綱要』に於ては國家經濟學)とは「國民經濟即ち經濟的國民生活の發展法則の學 die Lehre von den Entwicklungsgesetzen der Volkswirtschaft, des wirtschaftlichen Volkslebens)である。(Grundriss. S. 4. Grundlage. S. 42).

49) Grundlage. S. 34 ff.

精神科學的であるとは言ひ難い。従つて彼の自然法則は數學的・物理學的傾向を、發展法則は生物學的傾向を有つ。だからこそ彼は個人の自由意志を前提とするも個人の意識にとつて經濟法則（自然法則・發展法則）は無自覺的必然であることの認識に於ては誤らなかつたが、而も社會一體・國民總體の立場に於てはその必然の法則を自覺的に具體化し或は變化せしめ得ることに思ひ及びもしなかつたのである。かくして彼の歴史的方法是普遍的な發展的典型の研究にとゞまつて眞に個性的な「國民科學的法則」⁵³⁾とも云はるべき發展法則の研究に迄は進み得なかつたのである。

(二) 更にロツシャールの神祕的有機體說によれば國民經濟は神の創造物であり、而もその發展は生物學的に必然的である、従つて有限な人間の實踐は無力であり、理想は人間的弱點をもつ⁵⁴⁾。かゝる國民經濟觀に基く方法論の當然の歸結として彼は理想的方法を放棄する。そこに吾々はロツシャールの方法が精神科學的方法から遠ざかるを見る。一體謂ふ所の理想的方法とは理論的研究方法の一部たる理想化的方法にとゞまるものでなくむしろそれを成立せしめる最も具體的なものである。即ちそれは理論的研究方法と歴史的研究方法とを、即ち存在⁵⁵⁾の研究方法を止揚した常爲^(Sollen)の研究方法にして「實踐的研究方法」⁵⁶⁾とも云はるべきものである。ロツシャールの歴史的方法是抽象的方法の名に於て理論的方法を止揚したけれども理想的方法は之を放棄した。——尤もここに放棄といふのは、當爲と存在との問題の何れかの「一に専ら満足することは出来ぬであらう」と彼自身述べてゐる所からも察せられる如く絶對的否定ではない、従つて彼も亦相對的政策論の

50) Grundlage. S. 42-43. Grundriss. S. 5. Grundlage. S. 54-55. 尤もその際經濟生活の歴史進行の契機としての重要性とその倫理的價值性との混同の嫌はないではない。『ドイツ經濟學史』に曰く、歴史的實證的傾向はまた倫理的とも呼ばれ得る」と。(S. 1034). 51) Grundlage. S. 34. S. 37. Anm.
52) Grundlage. S. 866. 53) 作田博士「國民科學の成立」30頁。
54) Grundlage. S. 867. 55) 石川博士「精神科學的經濟學の基礎問題」303-4頁。

可能を認めたと考ふべきであつて、こゝで問題であるのは、存在の研究の決定的優越に伴ふ理想的方法の斷念である。――それを放棄した方法上の理由は理想の相對性の故に種々の國民性と同數だけの理想が必要であり、且つ國民及びその要求の變化と共に變化せしめて行くことが必要であるのに、かゝることは學者的才能の能くし得ぬところであるから、理想の作製を全然斷念して、之を實際家の本能的活動に委せるといふのであつた。然しこれは實踐的研究の普遍的なるものと個性的なるものとを混同したに過ぎぬ。

吾々は國民經濟の理想について考へ直さねばならぬ。吾國民經濟學の確立に當つて要求されるのは日本國民理想であつて、ドイツのそれでもロツシャのそれでもない。即ち吾國民理想は吾國民史を貫いて變らざる國民性の洞察に基き吾國民的生命の發展を圖らんとするものであることは言ふまでもない。けれどもこゝにとゞまれば空疏にして排他的な國家主義或は國粹主義に終る。だから同時にそれは世界史の各段階を通じて變りなき人間善の實現、從つて現段階に於ては人類解放を目的としなければならぬ。換言すれば吾國民理想は個性的なものであると同時に人類理想を含んで中外に施して悖らざるものでなくてはならない。だから世界史的理想を直に個別的國民理想と混同するのが誤りであると同様に、國民理想の特殊性のみを高調するロツシャ―の非難はあためぬ。國民理想と人類理想とが眞に矛盾なき統一に來るもの、それこそが自己を愛すると共に他を尊重する國民主義的理想であらう。刻々の變動に際してもかくして確立された理想に照して善

處さるべきであつて、決して單なる實際家の本能的行動に委さるべきではない。かくしてもなほ吾々は、ロツシャーの指摘する如く時空の制約を免れ得ぬかも知れぬ。けれども吾々はその制約の故に理想を斷念すべきではない、むしろ逆に、理想が空想ではなくて具體的であるがためには時空の原理を含まねばならぬのである。元來ロツシャーの歴史的方法是時空の規定を含んだ具體的な國民經濟學の確立を目標とした筈であるが、時空の制約の故に理想の樹立を斷念せんとするは、却つて時空を超越した普遍的な經濟學の意欲といふ彼自身の矛盾を暴露するものではなからうか。——要するに眞の精神科學的國民經濟學は歴史を含み將來社會を目的した實踐的立場に於てのみ成立する。かゝる立場に於ける理想的或は實踐的方法是、理論的研究を指導してそこに理想化的方法を可能ならしめ、歴史的研究を導いて眞に具體的な個性の發展法則を理解せしめ、これらの研究の基礎の上で政策論を可能にすることによつて實踐學をして實踐學たらしめる。この故か方法論上は理想的方法を否定したロツシャーが實際『體系』を展開するに當つては到る所に當爲の主張を有つ。けれどもそれは彼の穩健な人格の表現に過ぎず、明徹な理想の表現ではない。⁵⁶⁾

(三)方法論から見て理想的方法是實踐學をして實踐學たらしめるものであるが、理想的方法を否定したロツシャーの實踐觀は問題となり得る。彼は『綱要』に學説は實踐を安易ならしむるものではないが實踐に役立つと言ひ、⁵⁷⁾『原論』にも「吾々は書物そのものゝ内で實踐的であるといふ事にではなくて實踐家を造り上げるといふ事に向けられてゐる云々」と述べてゐる。⁵⁸⁾だから彼は決して

56) 例へばさきに見た改革論參照。
57) Grundriss Vorrede. S. V. S. 2.

Max Weber, a. a. O. S. 40.
58) Grundlage. S. 73ff.

て實踐を否定するものではない。然し謂ふ所の實踐は十七・八世紀のカメラリスト的傳統の意味に於てある。カメラリストは行政事務に志す學生に行財政の原理を教へ従つて出来るだけ事實に注意した。ロツシャールは英國流の學說を、産業的に大いに後れたドイツに適合する様に訂正しそれを以つて實際家を教育せんとしたのである。⁵⁹⁾これは彼の生涯を通じて變らなかつた實踐的使命である、現に彼の『國民經濟學體系』は『實務家及び學生の參考書並に讀本』⁶⁰⁾といふ副題を有つ。

然らば何故一方に於ては實踐を認めつゝ、他方に於ては大かれ少かれそれなくしては如何なる實踐も有り得ないところの理想を否定したのか。それは彼の社會的生的事情とそれに對する彼の使命とからも明かにされるであらう。最初の使命はドイツの産業を英佛的水準にまで引上げることであつた、そのための産業革命に於て理想の必要であることは勿論である、彼は『綱要』(一八四三年に於てはその主觀性を指摘したのみで、取立てゝ理想的方法を非難しなかつた。まさにその頃ドイツ資本主義の歴史は始る。ドイツ資本主義はその母胎から労働者運動を伴つてゐた。一八四〇年代の初に於ては御伽話の様であつた社會主義運動は漸次盛んになつて來た。⁶¹⁾ロツシャールは社會主義運動を國民經濟なる有機體にとつて「高き文化國民にあつては一定の生命段階に於て殆んど規則的に繰返へさるゝところの一の疾病」⁶²⁾に過ぎぬと見、「社會主義者は専ら當爲のみを描く」⁶³⁾と考へた。だから社會主義運動に反對してドイツ資本主義を發展せしめんとする要求が彼をして、『綱要』に説いた哲學的方法から理想的方法を特に抽き出して『原論』(一八五四年第一版、一八九二年生前最終第二〇版)に詳論

59) Gide et Rist, Histoire p. 455. 關末代策氏譯『コツナ經濟學史』303頁。

60) System der Volkswirtschaft, Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende. 61) Gesch. d. N=Ö. in Deutsch. S. 1020.

62) Grundlage. S. 233, Gesch. S. 1032. 63) Grundlage. S. 71.

64) 尤も彼は、自由貿易論者、社會主義者、保守主義者、官僚等「これらすべてを正しき國民經濟學は聯關づけるのみならず又その最末の枝葉・深き根柢ま

し、且之を斷念せしめたと考へられる。かくしてロツシヤの國民經濟學は勃興しつゝあるドイツ資本主義促進並に保持のための市民的國民主義とも言はるべきものに過ぎず、社會主義に對立するのであるが、その點に於て現代の國民主義的經濟學が單に社會主義のアンティテーゼたらんとするものでなくそれを止揚せんとするのは大いに異なる。

要之、ロツシヤがリカード學派の理論的研究の偏重を批判して、歴史的方法の重要性を強調したことは彼の大なる功績である。而もリカード學派を捨て去らず、その功績を認めて抽象的方法と其の成果たる自然法則を承認した點、並にこの自然法則の基礎の上に發展法則を認めた點に於て、彼は單なる歴史主義者、相對主義者ではなく、その限りに於て固有の歴史學派から遠ざかるときへいふことが出來よう。實際彼が尤大な『體系』に於て成し遂げたところは正統學派の理論に該博な歴史的知識を並べ立てたに過ぎないとさへ云はれ得る點がこゝにある。けれども同時にそれだけ彼は單なる相對主義者に比し具體的であつたとも言はねばならぬ。而して彼の方法をして眞の精神科學的方法から異らしむるものはその有する自然科學的傾向と理想的方法の放棄とである。吾々はロツシヤの功績を認めつゝその自然科學的傾向を去り理想的方法を拾上げることによつて、彼の歴史的方法をも止揚的契機とする眞の精神科學的研究方法を確立しなければならぬ。そのためにはロツシヤを建設者とする歴史學派發展の跡づけが少くとも經濟學史の發展といふ觀點から、缺くべからざる媒介であると考へられる。

で統計的且つ歴史的に基礎づけねばならぬ云々」(Gesch. S. 1046-47)と書いてはゐるけれども、彼が實際なしとげたところはそうではない。